



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	書評：中川裕著『アイヌ語広文典』（白水社，2024）
Author(s)	佐藤，知己
Citation	北海道大学文学研究院紀要，177，9（左）-32（左）
Issue Date	2025-12-24
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.177.19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98611
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_177_Sato.pdf



書評：中川裕著『アイヌ語広文典』（白水社、2024）¹

佐 藤 知 己

1. はじめに

中川裕著『アイヌ語広文典』（以下『広文典』）は近年出版されたアイヌ語に関する書籍としては最大のものである。今後もこれほどの規模のものはそう容易には現れないのではないと思われる。従って、同じくアイヌ語研究を専門とする者として、本書を学問的に論評することは、研究者としての責務であると考えるので、むろん、役不足は承知の上ではあるが、気の付いた点を述べることにしたい。なお、初めにお断りしておきたいが、以下は専門的な観点からの論評となるので、自ずと批判的な論調になることは避けられない。しかし、アイヌ語研究の専門家による著作であるので、実用上は大いに価値がある書籍であることに何ら異論はなく、今後、長く標準的な文法書としての位置を占めるものになるであろうことは疑いない。頭の切れる、勉強のできる非専門家が先行研究に基づいて器用にまとめた記述にもすぐれたものは多々あるであろうが、中川氏はアイヌ語話者との実地調査を約半世紀も前から行ってきた正真正銘のアイヌ語の専門家である。その点でも重要性の高い注目すべき著作であることは論をまたない。その大きな価値を認めた上での論評である、ということ念のため最初にお断りしておく。

¹ 本稿は2025年度科学研究費「基盤研究（C）22K00501：研究代表者：佐藤知己（北海道大学）：古文獻資料によるアイヌ語史の再検討」に基づく研究成果の一部である。

2. 『広文典』の特色

『広文典』の特色は、まず、その分量の多さにある。索引も含め、総ページ数は657ページもあり、使用されている例文の数は1000を軽く越える。まさにアイヌ語文法書の決定版、とも言える偉容を誇っている。内容も豊富で、数多くの先行研究の内容をふまえ、従来のアイヌ語の文法書が簡単にしか触れていないか、あるいは全く触れていないようなテーマについても多くのページが割かれている。具体的には、従来の文法記述では、沙流方言、千歳方言、幌別方言を中心として説明がなされ、他の方言については詳しい言及がなされないことが多かった。しかも、誰からの情報なのかの明示も十分でなく、信頼性に不安が残る場合も少なくなかった。しかし、『広文典』（中川2024：16-21）では石狩方言、十勝方言、静内方言、様似方言、白糠方言、樺太方言その他の方言についても具体的に言及がなされ、どの話者からの情報であるかも明記されている。また、「文体と表現」という章ではアイヌ語のさまざまなスタイルについての記述があり、特にアイヌ文学に関わる言語現象が豊富な例によって説明されている。これは、アイヌ文学を読むためにアイヌ語を学ぶ読者にとっては大きな価値を持つものであろう。このように、『広文典』は出典が明示された信頼性の高さに加え、扱う問題の広さにより、これまでのアイヌ語文法書の欠落点を補うという点で、重要な価値を持つ書籍と言えるであろう。

3. 『広文典』への疑問

『広文典』が高い価値を持つことを認めた上で、研究上の観点から気になる点を以下にあげておく。まず、全体的な方針についてであるが、中川氏は本書の目的を自らこう述べている。

アイヌ語を実用的に使えるようになりたいという人のためにはなるべ

くわかりやすく使いやすく、その一方で、アイヌ語の研究を志そうという人には厳密な記述を得られるということの、双方を満たそうと努力した。結果としておそらく両方とも満足のいくものにはなっていないと思うが、できるだけ工夫をしてみた。ただし、後者の目的のためには、それぞれの文法的な項目について、誰がいつそのようなことを言及したかということについては、必要最低限にとどめたことをお断りしておきたい。

（中川 2024：15-16）

英語のような膨大な研究のある分野なら、こういう主張も説得力があるだろうが、アイヌ語のように研究の少ない分野では首をかしげてしまう。主に自分自身の調査資料に基づいて議論するのであれば、こういう態度も大きな問題とはならないだろうが、本書のように、数多くの他の研究者の文法書や研究論文を総合したような著作では、著者自身の見解なのか、参考文献の見解なのか、区別がつきにくい、という叙述の仕方は、学術研究というものに対する敬意を欠いた態度に映る。一般向けの著作であれば、そういう態度を取ってもよいのか。自分のものと他人のものの区別をつける、というのが学術研究の第一歩なのであるから、こういうやり方は、やはりアイヌ語の学術研究というものに対する敬意を欠いた態度であると思う。それに、先行研究を統合する場合、どうしても誤りが避けがたいという問題もある。たとえば、千島方言に関して「いわゆる「ゴローニン事件」のヴァシリ・ゴロブニンから聞き取られた北千島アイヌ語の語彙」（中川 2024：84）という表現を用いて Bugaeva and Sato (2021) を紹介している部分が挙げられる。「ゴロブニンから聞き取られた」というのは意味がよくわからない。ゴロブニン自身がアイヌ人から聞き取った語彙というのならわかるが。膨大な先行研究を統合した書籍ではありがちなことだが、ワープロの編集機能などを用いて自動的に処理することも基礎作業としては必要であろうが、最終的には人間の目でチェックしないとこのように正確を期しがたい点がどうしても出ると思う。一考を望みたい²。

次に、具体的な細かな諸点について述べる。これは、このような浩瀚な書籍では不可避ではあると思うが、中には、表現が不備で、意図を正確に汲むのが困難な部分が散見される。たとえば音韻に関する以下のような個所である。

また、例えば沙流方言の人称接辞 ku「私が」、ci「私達が」は、/a,u,e,o/で始まる単語の前で、それぞれ、/u/, /i/が脱落するという現象がある。/'/を認めない立場であれば、母音始まりと子音始まりの単語で違うという説明で済むが、/'/を認める立場では、/'/が他の子音と違うふるまいをするということを示し、さらにその/'/を脱落させるというルールを設定しなければならない。そしてこの/'/の脱落は随所で起こるので、/'/を認めれば無くて済むルールを、数多く立てなければならないことになる。

(中川 2024 : 33)

この説明は/'/ (喉音音素) をアイヌ語に仮定することに対する疑問を述べたものであるが、若干、混乱を含む、わかりにくい説明となっている。確かに、/'/を仮定せず、「母音始まり」の単語というものを認めれば、k-, c- という異形態の出現条件の指定は簡単になる、ように思える。ここだけ見ると、アイヌ語の専門家ではない人間は、さすが言語学的に深い分析だ、と思うかもしれない。しかし、事実はその逆で、中川氏の説明は場当たりので混乱していると言わざるを得ない。中川氏の説明の重大な問題点は、/'/という子音を仮定せずに、母音で始まる音節をここで仮定しなければならない理由については何も述べていない、という点である。つまり、「/'/を仮定してしまうと、/'/が先行の母音を削除した後、自らも削除されなければならないのは

² 邦訳のあるものは便利であるが、人間のすることであるから誤り無さを保証し難いので注意が必要である。たとえば、村山 (1971) はディボフスキの北千島アイヌ語資料の邦訳を含んでいて貴重であるが、原文と比較してみると脱落があり採録されていない語彙もある。

経済性に反する」と述べているが、中川氏の分析をそのまま適用してしまうと、たとえば、kaeka「糸をよる」のような単語の音節構造や音連続の説明に困難が生ずる。中川氏によれば、eka「よる」は母音で始まる語、と認定することになるので、kaekaは、CVVCV /kaeka/ という音韻論的音節構造を持つことになるのではないか。この場合、CVV という音韻論的音節型を新たに認めるのだろうか。おそらく、そうはせずに、CV-V-CV という3音節から成る単語、という解釈をとるのではないか。しかし、もしそう考えるとすると、音韻論的に母音連続を認めることになってしまう。多くの言語で、音韻論的には母音連続が回避される強い傾向が見られることを考慮すると問題のある解釈ということになるだろう。もちろん、アイヌ語に母音連続を認める立場もあり得る。日本語の「鯛」[tai] /tai/（比較：「他意」[tai] /tai/）のように、/ai/ という母音連続を音韻解釈として日本語に認めるという解釈も過去には提案されたことがあり（服部 1979：185）、アイヌ語においても理論的に絶対に不可能とまでは言えないと思う。ただ、問題なのは、中川氏がそこまでの考慮を行った上で /' / の音位論的なステイタスを問題にしているとは思われない、という点なのである。アイヌ語に /' / という音素を提案したのは服部（1964：34）であり、中川氏の主張は服部に対する反論と言える。その点は中川氏に筆者も賛同するが、服部も中川氏も見逃しているのは、/' / の現れる規則の順序付けに関わる問題である。すなわち、服部も中川氏も、暗黙のうちに /' / の有無が二分論的に決定できる問題であるとして立論しているが、これは誤りであると思う。ただ、服部は「はじめから終わりまでであるもの」として /' / をとらえ、中川氏は「はじめから終わりまでないもの」としてとらえている点が違うだけである。ここで詳しく述べる余裕はないが、佐藤（2015：6）で述べているように、アイヌ語の /' / という音素については、「初めからは存在しない」という点では中川氏は正しいが、常に存在しないわけではなく、必要な条件が満たされた場合は最終段階で挿入される、と考えるのが妥当である。さらに言えば、/' / は語彙的、文法的な機能は持たないが、派生の最終段階で当該形式の形の表示に不可欠な音素として生起し得るので、形式素 (formative) (Katamba 1993: 38) と呼ぶのがより妥当である。い

ずれにしても、繰り返しになるが、服部のように「初めから終わりまで存在する」のでもなく、中川氏のように「初めから終わりまで存在しない」のでもなく、「初めからは存在しないが、派生のある段階で挿入され、当該形式に該当する音素連続の一部をなす」音素、とみるのが言語学的には正しいと思われる。

次に、中川氏のアイヌ語のアクセントに関する記述を見てみよう。派生語のアクセントについては中川氏は次のように述べる。

派生接辞が接頭する場合には、派生接辞のついた形をひとつの語と見て、そこに原則 1, 2 が適用される。したがって、元の語のアクセントが移動する場合がある。

例：iták 「話す」 → yáykoysak (< yay-ko-itak) 「独り言をいう」
 puní 「～を持ち上げる」 → epúni 「～の頭を持ち上げる」

接尾辞は通常アクセントの位置に影響を与えないが e 「～を食べる」, ku 「～を飲む」, kar 「～を作る」などの単音節語に使役接尾辞, -re, -te, -e がついた場合には、アクセントは語幹に残り、結果として原則 2 の例外になることがある。

例：e → ére 「～を～に食べさせる」
 ku → kúre 「～を～に飲ませる」
 kar → káre 「～を～に作らせる」

ただし、kor 「～を持つ」に対して、同じ派生法で kore 「～に～を与える」が形成されるが、kóre ではなく koré となる。これは、kore が kor-e だという語源意識が薄れたために、通常原則 2 が適用された結果だと考えられる。

複合語のアクセント

複合語のアクセントがどのようなことになるかということについては、まだ十分にわかっているわけではないが、おおざっぱな傾向として次のように言うことができる。

- ①ふたつ以上の自立語によるアクセントは、前部要素のものだけが残し、全体が一語として扱われる。

例：kamúy「カムイ」、nomí「～に祈る」→kamúynomí「カムイに祈る」
hórka「逆さに」、reyé「這う」p「もの」→hórkareyep「ザリガニ」

- ②前部要素が単音節語の場合は、前部要素にアクセントがおかれる。

例：ni「木」、tek「手」→nítek「枝」

- ③ただし、①②はすべての複合語に適用できるわけではないので、単語ごとに覚えておく必要がある。

（中川 2024：54）

ここで中川氏が「原則 2」と述べているのは「第 1 音節が開音節（母音終わり）のとき、第 2 音節が高く発音される」というものである。ちなみに、「原則 1」は「第 1 音節が閉音節（子音終わり）のとき、第 1 音節が高く発音される」というものである（中川 2024：5）。

上記の中川氏のアイヌ語のアクセントに関する説明はかなり詳しいものがあるが、あまり正確とは言えない点もある。たとえば、中川氏が念頭に置いている沙流方言や千歳方言では nómi である。nomí という語形は何に基づいているのか。もし、ミスだとしたら、少々お粗末ではないか。もちろん、誰しも勘違いや、不注意なミス、というのは避けられない。そういう点にまでメグジラを立てる、というのは生産的な態度ではない、誰しもこういうこ

とはある、と私も思う。また、この場合、第2要素のアクセントはキャンセルされるので、問題ないと言えば問題ないとも言えるが、アクセントについてわざわざ言及する際に、基本的なデータに疑義がある、という事態はやはりまずいのではないか。改訂版の際には必要があれば訂正していただきたいと思う。

さて、中川氏のアクセント記述の仕方にはもっと重大な問題がある。それは、そのままではアイヌ語の実態と必ずしもよく適合していないと思われる説明が散見されることである。

たとえば、「接尾辞は通常アクセントの位置に影響を与えないが」と述べているが、これはどういうことを言おうとしているのだろうか。たとえば、名詞所属形の形成には接尾辞が用いられるけれども、sik, sik-i「目」のような事例が普通であることを念頭に置くとこの中川氏の説明には首をかしげざるを得ない。また、動詞の派生に際しても接尾辞が用いられる場合があるが、これも tuy, tuyé「切れる、切る」のような例が容易に思い浮かぶので、やはり適切な説明とは言えないのではないか。

しかし、中川氏の上記の説明で、もっと問題だと思われるのは、特殊な事例なのか、一般的な事例なのかの区別があまり明確ではない、という点である。たとえば、「kar「～を作る」などの単音節語に使役接尾辞、-re, -te, -e がついた場合には、アクセントは語幹に残り、結果として原則2の例外になることがある」とあたかもこのような事例が一般的であるかのような説明を行っているが、使役接尾辞が-eを取る動詞で、単音節の動詞、ということになると、そもそも、kar「作る」と kor「持つ」くらいしかないわけで、このような少ない例しかない現象、しかも動詞の例だけを根拠に「アクセントは語幹に残り」と一般化して良いものだろうか（中川氏が kar → káre「～を～に作らせる」という例の重要性に気付いて挙げていること自体は、私は高く評価するに吝かでないが）。実は単音節語と言っても、中川氏は区別していないが、CV型とCVC型ではアクセントに関するふるまいが相当異なることが既に指摘されている（佐藤 2015: 6, Sato 2022: 554）。CVC型に接尾辞が付く場合、名詞所属形の場合は言うまでもなく、例外はあるものの、動詞

派生形、合成語についても、私見による計数結果（佐藤 2015：6）では、アクセントはCVC 語幹の場合、語幹部である第1音節ではなく、第2音節に移動する事例のほうがむしろ一般的であると言ってよいような状況である³。つまり、動詞について言えば、むしろ kár-e 「作る」と kór-e 「持つ」のような例のほうが例外的ではないかと思われる⁴。この文法書が将来持つであろう権威を考慮すると、中川氏はアクセントについて述べた部分について真剣に再考すべきと思う。

次に、やはり音韻記述についての問題点として中川氏が「母音弱化」として挙げているものについて述べる。中川氏は母音弱化について次のように述べる。

母音 iu で始まる語の前に別の要素（以下の例文では X で記号化しておく。多くの場合は接頭辞）が来ると、 $i \rightarrow y$, $u \rightarrow w$ のように、子音の y, w になる現象である。母音が子音化することによって、アクセントを担えない単位になるということで、母音弱化と呼んでおくことにする。

$X + i \rightarrow Xy$ ko- 「～に対して」 + itak 「話す」 $\rightarrow$ koytak 「～に話す」
e- 「～について」 + ikoytupa 「うらやむ」 $\rightarrow$ eykoytupa 「～をうらやむ」

$X + u \rightarrow Xw$ e- 「～について」 + ukoytak 「会話する」 $\rightarrow$ ewkoytak 「～について会話する」

yayko- 「自分に向かって」 + uepeker 「物語る」 $\rightarrow$ yaykowiepeker⁵ 「困っ

³ 佐藤（2015：5）では2割ほど存在する例外的事例についても句アクセントという概念を用いて一応の説明を与えているが、例外には後続に1音節の動詞が来る2音節語が多い点に注目すると、第2音節にアクセントがあると合成語であるにもかかわらず形態素単語であるCVCVを持つ語との差別化ができにくくなることも要因の1つである可能性をさらに指摘しておく。

⁴ まったくのspeculationであるが、kar「作る」、kor「持つ」と並んで、かつてのアイヌ語には*ka「作る」、*ko「持つ」という形式があり、それに使役接尾辞-reが付いたものである、という可能性もゼロではないと思う。

⁵ この語形はどういうデータに基づいているのだろうか。佐藤のデータに関する限り、千

て色々考える」

これらの母音弱化は沙流・千歳方言ではよく見られるものであるが、それ以外の方言については、今後の検証が必要である。なお、iunin「痛む」という動詞は[iyunin]と発音され、iyuninと表記されることも多いが、千歳方言では「私は頭を痛くさせた」=「私は頭が痛い」というとき、kusapaha kuyuninka という。iyunin に人称接辞がついてこの母音弱化が起こったのだとしたら、kuyyuninka となるはずだが、kuyuninka となるのは、音韻としては/iunin/なのであり、ku+iunin → kuyunin のように、iunin の語頭の i が弱化して y になっていることを示す。つまり、[iyunin] の [y] は音素ではなくて、わたりであることになる。沙流方言でも、人称接辞 e= がついた例として eyyunin ではなく、somo eyunin ya? 「あなたは痛くないか?」という例がある（方言辞典：338）。

（中川 2024：40）

この説明は、一見、アカデミックで理路整然としているように思われるかもしれないが、学問的な説明としては不正確なばかりでなく非論理的、やや強めの表現を用いれば用語の使用法にも大きな問題があつて、言語学的には「意味不明」な分析であることに注意が必要である。

さて、中川氏の説明のポイントは「[iyunin] の [y] は音素ではなくて、わたりであることになる」という部分であると思われる。まず、些細と言えは些細な誤りであるが、音声記号として [y] という表記を用いているが、これは便宜上のものだろうが、音声記号としては正しくは [j] とすべきものであろう。二度同じ表記を用いているので、単なるミスではない。いやしくも音声現象について説明する場合に、このような妥当でない処理をしているのを

歳方言では、この語形は yayko'uwepeker のような形に該当する例しか得られていない。そもそも、u の後が子音の場合と母音の場合とを一緒に論じるのは議論の仕方が雑ではないだろうか。

見ると、説明が十分な考慮の結果であるのかどうかの信頼性が疑われる。もっとも、人間誰しも勘違いやミスはあるし、学術的な厳密さを常に貫徹できるとは限らない。私も同じである。些細なミスや不備で揚げ足を取るのは生産的でないのは私も認める。しかし、もっと問題なのは「音素ではない」とする論理そのものである。中川氏の真意は勿論不明だが、おそらく中川氏は「ゼロと交替する」という特徴を根拠に「音素ではない」と断定しているのだと思われる。では音素認定の際にこのような基準を用いることは正しいのだろうか。中川氏が述べていることは今一つ明確ではないが、推測するに、古くから知られている日本語のアクセント現象において語頭の「低」が前の語の影響を受けて「高」に交替する現象のような事例の解釈を念頭に置いているのではないと思われる。たとえば、竹村（2008：424）によれば、「かぎ」の最初の「低」は、「あいかぎ」では「高」と発音されるのが普通である。従って、この場合、「かぎ」の最初の「低」は環境が変われば失われてしまい、出現環境も指定でき、予測可能なので弁別的（distinctive）でない、と結論することになるだろう。しかし、「あいかぎ」のような事例とアイヌ語の *iyunin* という形式の *y* の音韻論的ステータスの問題とは全く別の性質を持つ現象であることに注意しなければならない。「あいかぎ」は隣接する特徴（「高」）による同化現象として説明できるが、アイヌ語の *iyunin* の *y* が前に人称接辞 *ku-*, *e-* を取る場合に「消失」する現象はそうではない。母音 *u*, *e* が遠隔的に *y* に作用して *y* を脱落させる、というようなプロセスは音声学的には承認しがたい。「低」の「消失」と *y* の「消失」とは混同してはならない全く別の性質を持つ音声現象なのである。しかも、中川氏の主張は、アイヌ語の音声の実質からもかけ離れている。そもそも「わたり」は音声学的概念であって服部（1984：35）の「[aba]」においては、[a] から [b] へ移るのに両唇が急に閉じて行き、[b] から [a] に移るには両唇が急に開く（破裂する）。調音器官（および声帯）のこのような運動、およびそれによって生ずるオトを「わたり」という」という定義が標準的なものであるのだが、アイヌ語の *iyunin* における *y* はこの服部の定義のようなものでは全然ない。服部の記述から明らかなように。「わたり」は音声学者でも観察が困難な微細

な音声現象であるが、中川氏が「わたり」と述べているアイヌ語の音声は有声の弱い摩擦を伴う接近音 [j] であって、i から u に移り変わる時に「自然に」生ずる「わたり」とは全く異なっているので、このような音声に対して「わたり」という用語を用いることは、そもそも音声学的な記述としては妥当でないのである。これだけで既に問題であるが、中川氏は「y [j] の出現は予測可能である」から「弁別的でない」と解釈し、「わたり」という用語を用いて「音素ではない」と結論付けているようであるが、このような論法は既に述べたようにアイヌ語については音声学的に妥当でないのみならず、一般的な音韻論的解釈としても承認し難いものである。もし、中川氏のような論法が音韻論的解釈において成り立つとすると、たとえば英語の複数形態素の [s] と [z] は生起条件が明らかで「予測可能」であるからその音声的差異は音韻論的に無意味で「弁別的」でない、よって同一音素である、と結論付けることになるだろう。言うまでもなく、このような「音韻論的解釈」は言語学的には正しくない。中川氏の説明の問題点は、音韻論的レベルの単位である異音と、形態論的レベルの単位である異形態とを混同している点にあると言える。結論的にいえば、{iunin} という語は、/iyunin/ という音素連続からなる異形態と /yunin/ という音素連続からなる異形態を持つ、と言うべきである。{ɬ} という形態素が /s/ と /z/ という異形態を持つからといって、/s/ と /z/ を一つの音素に統合できるわけではないであろう。繰り返しになるが、中川氏が {iunin} という基底形を意図して、/iyunin/ に現れる y を「わたり」と称しているのだとすれば用語法上はもちろん、音声レベル、音素レベル、形態音素レベルの区別を無視しているという点で、理論上も不適切な記述と言わざるをえない。さらに言えば、/iyunin/ に現れる音素 /y/ は、上記の喉音音素の議論でも触れたように、やはり指定された条件で後から挿入される形式素の一種とするのがより妥当であると思われる。なお、この問題に関連する詳しい議論は佐藤 (2021a) を参照していただきたい。

次に、私見によれば、中川 (2024) における理論的にもっとも顕著な主張は、「アリティ」という概念をアイヌ語の文法の説明に持ち込んだことであろう。中川氏の説明は以下のようなものである。

アリティ

動詞は語根と動詞を形成する形成接辞とで成り立っている。kom は「折り曲げる・折れ曲がる」の語根であり、それだけでは動詞として文中に現れることができないが、kom-ke のように形成接辞 -ke をつければ「折れ曲がる」という 1 項動詞となり、kom-o のように形成接辞をつければ、「～を折り曲げる」という 2 項動詞になる。また tuy は tuy-e のように形成接辞 e をつけることにより 2 項動詞「～を切る」になるが、tuy だけで「切れる」という 1 項動詞にもなる。

このように自立語として成立する一番小さな形、上の例で言えば、komke, komo, tuye, tuy といった形を、動詞の基本形と呼ぶことにする。

基本形においては 1 項動詞から 3 項動詞までが認められるが、前述のように基本形で 3 項動詞であるのは「～を～〈場所〉に入れる」1 例であり、他のほとんどすべての動詞は、1 項動詞か 2 項動詞に分類される。それらの基本形にさらに派生接辞がついたり、目的語などを抱合したりすることによって、0 項から 4 項までに変化する。

そのような項数の変化は、基本形とそれらの接合要素との組み合わせ、つまり表層的な構造からきちんと計算ができる。その計算を行うのには有効な手段がアリティ (arity) である。アリティという用語はもともと記号論理学の用語で、関数のとる項 (引数) の数を表す。つまり、 $f(x) = 2x$ の項は x ひとつなのでアリティ 1、 $f(x, y) = 2x + 2y$ の項は x と y なのでアリティは 2 というようなものである。これをアイヌ語を含む日本北方の言語の分析に応用したのは、金子 (1999: 203) が最初だと思われるが、そこでは今まで説明してきたような動詞の「項数」を表すのに使われている。本書ではさらにこれを拡張して、「動詞が名詞句を項としてとる能力を基準にして計算した値」を表す用語として使うことにする。

アリティはいわゆる「動詞価」「結合価」に相当するものであり、アイヌ語学においても新しい考え方ではないが、本書で言うアリティが「動詞価」や「結合価」という用語と異なるのは、動詞と名詞句との関係だ

けでなく、文中、語中のさまざまな構成要素に対して割り当てられ、かつ計算のできるような単位ということであり、このシステムを使うことで動詞や文の構造をより把握しやすくなる。

(中川 2024 : 136)

一見、何の問題もないように思われるが、中川氏自身も認めているように、既に同様な指摘は従来のアイヌ語学でも行われている（知里 1956, 切替 2003）。問題は、先行研究とどう違うのか、という点であるが、その点については詳しく述べられていない。名詞にも拡張した、というのが改善点なのだとしたら、それは根本的な改善点とは言えない。アイヌ語において名詞にも項を要求するものがあり語形成や統語現象において重要な意味を持つことは切替（2003 : 38）が既に指摘している。

このように中川氏の主張は、先行研究でも指摘されている内容を含み、必ずしも中川氏一人が全体の責任を負うものとは言えないが、先行研究も含め、中川氏が提案している「アリティ」という概念は、理論的には根本的な問題を含んでおり、実用的、教育的な概念としてならともかく、アイヌ語の文法現象の理論的な説明概念としては実は大きな問題を抱えるものだ、ということを目指しておきたい。

まず、私が問題だと思ったのは「アリティ」の観点から「4項動詞」というものがわざわざ立てられているという点である。中川氏自身も認めている通り、4項動詞はアイヌ語では「きわめて稀」なのである。こういうものの扱いは非常に難しいことが多い。つまり、アイヌ語の一般的な傾向から逸脱している現象を「稀だが存在する」という理由で独立の項目としてわざわざ立てるのは妥当なのだろうか。考え方の違いと言えばそれまでだが、アイヌ語の構造において境界的な事例を、例が少ないにもかかわらず珍しいから、というだけの理由で挙げてしまうと、非専門家によく見られる傾向であるが、「アイヌ語が稀な、珍しい特徴を持つ言語である」という主張が実態を無視して行われてしまう危険性があると思う。「非常に稀だがある」ということと「一般的である」ということとは、言語研究においては厳格に区別する努力が

なされるべきであると考え。さもないと、アイヌ語について必ずしも正しくない認識が一人歩きしてしまい、結果的にアイヌ語にとってマイナスになる危険性さえあると思う。なお、このような懸念は、中川（2024：210）の「動詞の語根と接辞の構造」という表にも現れている。詳細は本文を参照されたいが、この表を虚心に見ると、中川氏の「アリティ」の増減の記述では、4項動詞があたかも普通に派生可能であるかのような記述になっている。実は、この問題点は福田（1956：51）でも同様に中川氏同様、福田の図をそのままに受け取ると、あたかも4項動詞がアイヌ語では普通に派生可能であるかのような記述になっている。佐藤（2023b, 2025）はこの問題に触れたものであるが、アイヌ語においては3項動詞が既に統語的に極めて特殊な位置付けにあることを具体的に述べている。現時点で「アリティ」の研究において、このような観点に触れないのは理論的には小さくない問題であると思われる。ちなみに、中川氏のアリティの概念は、人称表示との関連においても問題を含んでいる。佐藤（2023a：39）でも触れたが、アイヌ語の動詞は、これまでのところ、2個までしか動詞に人称表示が認められない。その点から言えば、本来、3項存在する項のうち、2項までしか表示できない3項動詞は、アイヌ語においてはどちらかと言えば特殊な位置付けを持つ動詞と言えるのであって、その上さらに4項動詞という動詞型をアイヌ語の文法に仮定することに対して何の考察もない中川氏の態度はいささかのんき過ぎるように感ずる。また、中川（2024：137）は「3人称には接辞がついていないと見なし、アリティは0と考える……3人称にも形の無い、いわゆる「ゼロ接辞」がついているとする考え方もあるが、そうするとそのゼロ接辞に1人称などと同じく-1ないし-2のアリティを与えることになり、それだけで動詞のアリティが0になってしまう。つまり主語や目的語の名詞句がとれないことになってしまう」という記述にも問題がある。この状況は1人称、2人称および中川氏の言う4人称にも共通する問題であって、1、2、4人称の場合にも、頻度は少ないとはいえ、独立の人称代名詞が人称接辞と共起可能であり、「相互照応 cross-reference」（Bloomfield 1933: 193）と呼ばれる現象と言える。従って、3人称の場合にだけアリティとの関連で接辞の有無を問題にするの

は理論的に首尾一貫しない議論という印象を受ける。他の人称でも事情は同様であるからである。これだけでは3人称の接辞を認めない理由としては不十分ではないか。さらに、3人称の接辞が存在しないのであれば、なぜ *en-e-raykere「彼が私にお前を殺させる」のような形式がアイヌ語では実際には見られないのか、という事実を説明することも困難になるだろう（佐藤（2023a：39））。3人称の接辞が存在しないのであれば、動詞には2項しか表示がないので、理論的には十分この種の形式は存在可能なはずである。この問題は、中川氏の主張に反し、アイヌ語においてゼロ形式の3人称接辞を積極的に認める必要性を示すものと言える。すなわち、ゼロ形式の3人称主格人称接辞が必須であるからこそ、既に2項が表示されている場合には「人称表示は2項まで」という制約に反するので、実際には見られないのだ、と考えられる。

実は、中川氏の「アリティ」の理論上の深刻な問題点は、もっと他の点にある。それは「アリティの増減」の問題である。中川氏のアリティという用語の適用の仕方を見ると、中川氏は同じ動詞のアリティが場合によって増減することを容認しているようである。たとえば中川（2024：368）には、「easkay「～できる」は、ここでは助動詞扱いなので、アリティは0」という記述があり、同様な説明は他にも散見される。本来、easkay「～できる」という動詞はアリティ+2であるはずだが、場合によってはアリティ0になることがあり得るわけである。

ところが、実はこのような説明は従来のアイヌ語に関する観察と全く相容れないものなのである。中川氏は、基本的には助動詞という独立の品詞を認めることに後ろ向きで、拙著に対する書評（中川 2009：109）においても同様に「他動詞の助動詞的用法」という用語を用いることに積極的である。つまり、あくまでも動詞の1種なのだ、という態度である。しかし、中川氏によると（中川 2024：126）「動詞が必須とする名詞句の数が動詞によって決まって」いるわけであるから、easkay「～できる」という動詞のアリティが+2から0に減少するという説明は、中川氏自身のアイヌ語の動詞理解と矛盾した説明、ということになるのではないか。つまり、中川氏のアリティという

概念は、本質的な矛盾を抱えており、未解決の問題を含んでいる可能性が高いのである。このように中川氏の「アリティ」という概念は野心的なもので注目に値するが、理論的に十分な考察がなされているとは言えないと言わざるを得ない。再考を望みたい。なお、佐藤（2023b, 2025）はこの問題の解決を目指したものであり、動詞の結合価を「項スロット」（いわゆる統語的結合価）と「一般的意味役割結合価」（いわゆる意味的結合価）の2つに分けて考えることによって解決を図ったものであることを補足しておく。問題は多いが、ごく簡単に言えばアイヌ語の結合価は統語的であれ意味的であれ、一般に不変であるが、一般的意味役割結合価（の一部）が、結合価そのものに変わりはないが、場合によっては充足されないままになるケースがある、と考えることによって矛盾の解消を図っている。詳しくは拙稿を参照されたい。

中川氏の「アリティ」についての問題点は「抱合」の扱いにも現れる。中川氏（2024：491）では「助動詞抱合」というものが扱われ、*apkas-rusuy* = an「私は歩きたい」という例が挙げられている。そして、「本来的な助動詞である *rusuy* を動詞内に取り込んだ」と記述している。この記述は不可解である。*apkas* のアリティは1であるから、*rusuy* を抱合したら、アリティは0となるのではないか。そういう点の説明はどうなっているのだろうか。私なら、こう説明する。*rusuy* の統語的結合価は2であるが、助動詞なので、意味的結合価のうち、行為者は充足されないままになる。つまり、主格人称接辞は取ることができない（目的格人称接辞については問題だが、3人称のみを取る、と考えるか、「擬似抱合」という特殊な構造を取る、と見て、目的格人称接辞も取らない、と見ることもできる）。しかし、統語的結合価は2であるから、これが、アリティ1の *apkas* を抱合する。アリティ1の動詞は名詞としても機能できるからである。*rusuy* の統語的結合価は2だから、*apkas* を抱合してもアリティは1であるので、主格人称接辞 *-an* を取って自動詞活用を行うことができる。これに対し、中川の「助動詞抱合」の説明は、何が何を「抱合」しているのかについての明確な認識もなく、自身のアリティの観点からの説明もない。言語学的な記述としては、言葉が過ぎるかもしれないが、ずさんとも言えるものではないか。

同様な疑問は、中川（2024：159）のいわゆる「助動詞の pa」の「接辞化」という説明にも当てはまる。中川氏は pa のアリティを問題にすることもないし、kor「持つ」という他動詞をなぜ pa が抱合できるのか、という点についての考察もない（おそらく、中川氏は kor が pa を抱合して接辞化した、と考えているのだろうから当然だろうが）。しかも「接辞化」がアイヌ語で広くみられる現象なのかどうかについての言及もない。ちなみに、筆者（佐藤）の収集した千歳方言の資料中、-an pa という形式の例は非常に稀で、自然な発話では口承文芸中に数例あるのみである。二匹のカラスが物語る場面で、「私達がそう思った」と言う時に yaynu-an pa kusu と言っている。それに関連して、yaynu-as pa と言えるか、という私の問いに対して、話者は一貫して yaynu-as と言う、と答えており、yaynu-as pa が可能であるとは答えていない。そうではなくて、yaynupa-as なら言えるかもしれないが、と答えているのである。口承文芸にしか用いられない、しかも稀な -an pa という事例を元に、pa が「助動詞（接語）」である、と結論付けるのはどうなのだろうか。さらに、こういう例もある。2 人、3 人、5 人で考える、と言う時は、yay-kouwepeker kor okaypa と言える、と千歳方言の話者は答えている。また、口承文芸中にも sinna okaypa yakka「別々に暮らしていても」という例が 1 例みられる。okaypa という形式も稀な形式であるから有力な根拠とはならないが、千歳方言では okay は通常、oka という形で現れ、後ろに助動詞（例えば a）が来ても okay となることはないと思われる。従って、この点でも中川氏の pa を助動詞とする分析はなお一考を要するのではないだろうか。今後も研究が必要であるが、アイヌ語の複数マーカー -pa の文法的位置付けの考察においては、英語の所有形式素 's を「句の末端部分に接合される接辞」（Spencer 1991: 382）とする分析があるいは参考になるかもしれない。同様な考えは pe のような形式名詞にも今後、適用する必要があるかもしれない。

中川（2024：15）は「アイヌ語の専門的研究者は、この百年の間にたかだか数十人を数えるに過ぎない」と述べ、執筆にあたり「アイヌ語の研究を志そうという人には厳密な記述を得られる」ための「努力をした」と述べる。もちろん、誤ったり、不十分なところが残ってしまう、というのは研究の常

である。誰でもそうである。もちろん、私もそうである。しかし、遺憾ながら、以上のように、実際の中川氏の記述を見ると、中川氏の言葉は私には空しく響く。私に言わせれば、なぜ研究者が少ないかという日本の社会では評価されないからである。簡単で、何の努力も要しないから、価値がない、と思われているからである。私の知人にも「アイヌ語研究は海外に行かないので楽だから、格好が悪い。やはり、言語学者は海外で調査しなくては」と言った人がいた位である。私はこういう人は、言語学者として以前に、人間として失格であると思う。しかし、日本の社会ではこういう考えは決して珍しくない。だから、そういうものをわざわざやろうという人間もいないのである。そして、このような風潮のなかでは、アイヌ語研究者自身もまじめにやっても理解も評価もされないようなものに取り組む気持ちを失い、社会からもっと「評価」されることをやらなくては、考えるようになるのではないか。こういう点が変わらないまま、中川氏の言う「専門研究者」に「たくさん出てきてもら」っても、「明らかになることはたくさんあるはず」である、とは私には到底思えない。そんなものは何もないであろう。

これまで、主に言語学的な側面について述べて来たが、文学的側面についても、誤りとまでは言えないが、疑問に感ずる点があるので触れておく。中川（2024：622）は「フォーミュラ」という用語を用いてアイヌ文学の構造を説明するが、この用語の使用法に筆者は違和感を持つ。もっとも、いちいち、このようなくだらしない、小さなことでいちゃもんを付けるのも、自分でもいい加減、嫌になるのだが、今後、この用語がアイヌ文学の説明において普及するであろうことを考えるとやはり見過ごすべきではないと思うので一言しておくことにする。

「叙事詩におけるフォーミュラ」と言えば、やはり古代ギリシアの英雄叙事詩であるホメーロスの「イーリアス」や「オデッセイア」がまず思い浮かぶ。アイヌ叙事詩とホメーロスの英雄叙事詩はどこが共通していて、どこが違うのだろうか。高津（1966：149）でも、ホメーロスの叙事詩の説明の中でアイヌの叙事詩との共通性が言及されているが、「同じ叙事詩の技巧が認められる」と言っているので、中川氏がホメーロスの英雄叙事詩の説明におい

て用いられる「フォーミュラ」という用語をアイヌ叙事詩に対して用いるのは、あながち、的外れとも言えないことは確かである。しかし、高津が「同じ」と言っているのは「同じ場面や同じ表現の繰り返しが……非常によく目立っている」という点であって、高津が紹介しているホメーロス叙事詩における技巧の焦点は、もっと別な点にある。それは高津（1966：125-129）で紹介されている「脚」という概念に基づく形式上の制約である。ホメーロスの叙事詩は、1行が「長短短」という単位から構成されており、これが5つ続き、最後は「長短」もしくは「長長」で終わらなければならない。もっと重要なのは、3脚と4脚の間に単語の切れ目が来ると、そこで行が切れてしまった印象を与えるので、3脚と4脚にまたがる語で、脚の長短の制約にうまく当てはまるような形式が用いられなければならない。このような要請を満たすために、できあいの決まった句が用意されていて、その句を覚え込めれば、複雑な脚の要請を満たす朗唱が比較的容易になる。高津は「フォーミュラ」という用語を用いてはいないが、概略、ホメーロスにおけるフォーミュラ、というのは、このような脚を基本とした韻律上の厳密な制約を満たすために用いられる「常套句」としてよいであろう。小川（1984：612）によれば、ホメーロスの英雄叙事詩は、長短短、または長長という韻脚から構成されており行末尾の韻脚だけ長短が許される。韻脚を－UU（長短短）、－X（長短、または長長）で表し、可能な意味の切れ目の位置をA、B、Cで表すと以下になると言う「－UU　－UU　－(A)U(B)U　－(C)UU　－UU　－X」。この1行中の3韻脚目か4韻脚目の途中に意味の切れ目が来るように句が配置されなければならないため、たとえば、(A)の位置にはめ込める formula として、Pēlēiadeō Akhilēos「ペーレウスの子、アキレウスの」（「長（短2つ分）長短短　長短短　長短」）のような句が用意されている、という。問題は、アイヌの叙事詩に、ホメーロス叙事詩におけるような韻律に基づく「常套句」があるのかどうか、という、まさしくこの点にあると言える⁶。しかし、中川氏の説明を読む限りでは、肝心の点があまり

⁶ 中川（2024：606）で、u という要素の出現に韻律が関係している可能性が示唆されている

明確とは言えないのである。同じ文句が繰り返し生起することだけをもって「フォーミュラ」と断定しているのであれば、性質がかなり異なるものを同じ用語で呼ぶことになるわけで、誤解の恐れがあるので、一考を要するのではないか。はっきりしたことがわかるまでは「常套句」と呼ぶべきではないか。中川氏は、「アリティ」、「4人称」、「フォーミュラ」のように、新しい用語を導入するのがお好きらしい（私も嫌いではないが）。しかし、新しい用語を用いると、何か新しいことが発見されたかのような印象を受けるが、果たしてそうか。新しい用語を応用する前に、まず、同じ用語で呼んでよいか、よく吟味すべきと思う。

最後に、拙著『アイヌ語文法の基礎』（佐藤 2008）についての書評の中で中川（2009）がどちらかと言えば否定的なコメントをしている親族名詞の用法の問題について、既に佐藤（2021b）においても、ある程度の反論は述べてあるが、中川氏自身がどう扱っているかについて簡単に触れておく。中川（2024：226）は中川（2009：111）同様、「日本語とは違って、年下の相手にも親族名詞で呼びかけることができる」として、以下のような例を挙げている。

upaskuma ne ku=ye oasi kor k=an ruwe tapan na. ku-mataki. （沙流：田村 1984：46）

「言い伝えとして今語ろうとしているのですよ。妹よ。」

るが、確率を考慮すると問題がないわけではない。ごく単純化して考えると、u の後にアクセントのない音節が来たとすると、理論的にはその語は2音節以上の語であることになる。ところが1句を5音節からなるとすると、最初の語が2音節の場合、残りは2音節なので、語の途中で次行にわたる、ということがないと仮定すると、表現の選択肢が狭くなってしまう。u を挿入するメリットが少ないため普通は選択されないと見ることもできる。また、最初がu なら特別な事情がない限り次音節にアクセントが来るのは iambic foot（弱強脚）を基調とするアイヌ語では自明なのではないか（Sato 2022: 554）。従って、むしろ問題の本質は「当該個所で弱強脚が選択されなければならない理由があるのか、あるとすればそれは何か」ということなのであって、中川も奥田もこのことを十分には理解していないように思われる。

iyayraykere, ku=matkarku. (千歳)

「ありがとう姪っ子よ」

これらの例は貴重ではあるが、佐藤 (2021b) でも述べたように、どこまで一般的な現象なのか疑問が残るのではないだろうか。これら2例はいずれも普段、一緒に暮らしていない年下の親族に対して言われたものと考えられる例であり、やはり問題があると思う。中川氏の説明だと、日本語と違い、このような表現がアイヌ語では日常的に普通なのだ、ということになるが、これら2例だけで、本当にそう言っているのか。繰り返しになるが「例がある」ということと、「アイヌ語では一般的な表現である」ということの間には少なからぬ距離があり、両者を区別しないとアイヌ語について必ずしも妥当でない特徴付けが行われる恐れがあると思うのでやはりここで一言しておく。

4. おわりに

私的な思い出で恐縮であるが、白水社のいわゆる「広文典」シリーズは、私共の世代では憧れの書籍であったと思う。学生には高価で、そう簡単に買えるものではなかった。それでも、泉井久之助氏の『ラテン広文典』をなんとか入手し、よくわからないながらも目を通した記憶がある。もう半世紀も前である。ネットがない時代、参考書が少ない語学の場合だと、初歩を終えた後、もう少し詳しく知ろうと思っても他に手段がないことが多いので貴重であった。この本でiter「道」という名詞の変化形などを熱心に勉強したことを懐かしく思い出す。おそらく『アイヌ語広文典』も、初歩を終えた読者がさらに知識を深めることを意図していると思われる。やはり類書が少ない分野であることを考えると、時機に合った出版として、著者及び出版社に敬意を表したい。もっとも、社会的な常識から言えば、せっかくの立派な著作に対し、重箱の隅をつつくような批判的な意見を述べることは、場をわきまえない行為として眉をひそめられるかもしれない。しかし、他方、分野の特殊性を鑑みると、今後も、この本に代わる書籍が出ることはそう簡単には

ないだろう、と思われるので、学術的な観点から、この歴史的にも意義深い書籍に対して、単なる活字の組み方その他の皮相な点や社交辞令ではなく、専門家として内容的に深く立ち入って何らかの学術的コメントを行うことはやむを得ないと考えたということを著者をはじめ関係者にはお伝えしておきたい。

さらに言えば、学術の世界、特に日本においては、アイヌ語研究が理解者を得ることは容易ではなかったという実感がある。「簡単で誰でもできる、こんなものは学問ではない」、「遅きに失した。学問的研究対象とはもはや言えない」と教師達からは言われ続けて来た一方、一般からは研究レベルや言語保存における貢献度の低さを絶えず問題にされる。アイヌ語研究にはいまだ専門の学会もなく専門の部署も日本の学術機関には存在しない。日本ではなぜ、アイヌ語研究は他の言語研究と対等に、肯定的に扱われることがないのだろうか。状況を改善していくためには、社会を変える前に、アイヌ語研究自体が一般化、精密化を進めていくしか道はないと信ずる。このような信念に基づいて本稿を草したことを最後に申し述べておく。筆者の意のあるところを了とされたい。

参考文献

- Bloomfield, Leonard (1933) *Language*. London: George Allen and Unwin.
Bugaeva, Anna and Tomomi Sato (2021) A Kuril Ainu Glossary by Captain V. M. Golovnin (1811). *International Journal of Eurasian Linguistics* 3: 171-216.
知里眞志保 (1956) 『アイヌ語入門』 東京：楡書房。
福田すず子 (1956) 「アイヌ語動詞の構造」 『言語研究』 30：46-64。
服部四郎（編）(1964) 『アイヌ語方言辞典』 東京：岩波書店。
服部四郎 (1979) 『音韻論と正書法』 東京：大修館書店。
服部四郎 (1984) 『音声学』 東京：岩波書店。
Katamba, Francis (1993) *Morphology*. Basingstoke: Macmillan.
切替英雄 (2003) 『アイヌ神謡集辞典』 東京：大学書林。
高津春繁 (1966) 『ホメーロスの英雄叙事詩』 東京：岩波書店。
村山七郎 (1971) 『北千島アイヌ語』 東京：吉川弘文館。

- 中川裕 (2009) 「佐藤知己著『アイヌ語文法の基礎』大学書林」『北方人文研究』2: 107-111.
- 中川裕 (2024) 『アイヌ語広文典』東京: 白水社.
- 小川正広 (1984) 「ホメロスの詩と文字使用」『国立民族学博物館研究報告』9(3): 609-630.
- 佐藤知己 (2015) 「アイヌ語の合成語のアクセント規則とその例外について」アンナ・ブガエワ・長崎郁 (編) 『アイヌ語研究の諸問題』1-14. 札幌: 北海道出版企画センター.
- 佐藤知己 (2021a) 「アイヌ語千歳方言におけるわたり音化とわたり音挿入について」『北海道大学文学研究院紀要』163: 23-43.
- 佐藤知己 (2021b) 「アイヌ語学の諸問題」『北海道大学文学研究院紀要』165: 1-29.
- Sato Tomomi (2022) Noun incorporation. In: Anna Bugaeva (ed.) *Handbook of the Ainu language*. 549-572. Boston/Berlin: Mouton De Gruyter.
- 佐藤知己 (2023a) 「アイヌ語の動詞の結合価と3項動詞」『北方人文研究』16: 37-64.
- 佐藤知己 (2023b) 「アイヌ語の抱合と結合価」『Energeia』48: 1-24.
- Sato Tomomi (2025) Basic sentence structures in Ainu. In: Jenna Sorjonen, et al. (eds.) *Studia Orientalia* 126: *N'yng-dyuumgu, n'yng-ngafq: Festschrift for Ekaterina Gruzdeva*: 353-378.
- Spencer, Andrew (1991) *Morphological theory*. Oxford: Basil Blackwell.
- 竹村和子 (2008) 「日本語の自然なアクセントはどのように作られるか」『言語処理学会第14回年次大会発表論文集』: 424-427.
- https://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2008/pdf_dir/A3-2.pdf [2025年8月2021アクセス].